

新しい自分に出会う探究学習

生徒主体の探究学習を実現する 教師のあり方

『VIEW next』高校版 2023年4月号の特集では、主体的に探究学習に取り組む生徒、そして主体的に取り組みたいと苦勞する生徒の姿を追った。学校では今、「総合的な探究の時間」に限らず、あらゆる教育活動において、生徒の主体性の発揮が求められているが、それはどのような教師のあり方の下で実現するのか。岩手県立遠野高校^{とのおの}と長崎県・私立純心中学校・純心女子高校の探究学習にかかわったVIEW next編集部 統括責任者の柏木崇が、2校の教師とそれぞれの探究学習を振り返りながら語り合った。

2023年4月号の特集「新しい自分に出会う探究学習」は[こちらから](#)

岩手県立遠野高校
2学年担任(*1)

佐藤 紘大

さとう・こうだい

教師歴10年。同校に赴任して5年目。数学科。



長崎県・
私立純心中学校・
純心女子高校
高校3学年担任

槌本 六秀

つちもと・むつひで

教師歴26年。同校に赴任して27年目。理科。



聞き手

VIEWnext編集部
統括責任者

柏木 崇

かしわぎ・たかし



※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

*1 2023年4月から岩手県立水沢高校に勤務。

生徒にとって探究学習は「自分を変えるチャンス」

柏木 2022年度、私は遠野高校と純心女子高校の探究学習に、社会人の1人としてかかわらせていただきました。具体的には、遠野高校においては、社会人アドバイザーとして、中学生の数学力の向上のために高校生としてできるアクションを起こす15人の生徒と、オンラインと対面で継続的にやり取りを行い、活動を支援しました。また、純心女子高校では、「先生と生徒の対話による新しい授業」、「障がい者と健常者の関係をアップデートする」といったユニークな視点で探究学習に取り組む生徒たちの話を聞き、質問したり、感想を述べたりする、ビジネスシーンで言うところの「壁打ち」の相手を務めました。そうして生徒たちとやり取りを重ねる中で、生徒たちが探究学習を、自分を変えるチャンスの1つとして捉えていることに気づきました。それは、探究学習の現場に身を置いたからこそ得ることができた、貴重な気づきでした。

佐藤 遠野高校で私が主宰したゼミ「教育から地域課題へアプローチ フェーズ2」の活動計画書に、参加してほしい生徒像として、「自分を変える一步を踏み出したい人」と明記しました。実際、本ゼミを選んだ多くの生徒が、探究学習を通して自分を変えたいという意思を明確に示していましたし、自分を変えたいと強く決断した生徒ほど、1年間の探究学習を通じて大きく変化、成長したと思います。

槌本 遠野高校の実践レポートを読んで印象に残ったのは、ある生徒が前年度の探究学習を振り返り、主体的

に活動に取り組むことができなかったことについて、「この1年間は何だったのか」と後悔したという発言です。高校の探究学習が、調べ学習とも、大学の研究とも違うのは、自分のあり方・生き方を更新する学びだからです。この生徒は、「自分にとって、昨年の1年間は失敗だった」と自覚することで、自分のあり方・生き方を更新したいという思いを持って、探究学習のスタート地点に立てたわけですし、「この1年間は何だったのか」という言葉は、私の心をととても動かすものでした。そ



して、生徒が自分のあり方・生き方を更新したくなるような良質な失敗や後悔を、どのように生徒に経験させるかが、私たち教師に問われていると思いました。

自分を変えたいと思う要因は？

柏木 ただ、同じような失敗や後悔をしても、自分のあり方・生き方を更新したいと強く思う生徒もいれば、そこまでは思わない生徒もいます。同じ経験をしているのにもかかわらず、ある生徒にとっては自分を変えるチャンスになるけれども、失敗、後悔が素通りしてしまう生徒もいる。それはなぜでしょうか。

佐藤 理由は2つあると思います。1つは、自分とほかの生徒とを比較する経験があったかどうかではないでしょうか。本校の探究学習では、1年間の活動の成果を全校生徒に発表する機会がありますが、そこでは、主体的に活動できた生徒と、そうではなかった生徒とで、発表の内容はもちろん、発表時の表情にも大きな違いがあります。主体的に活動できた生徒の発表を見て、自分はこのままでは駄目だと思う生徒は少なくないと思います。そうした思いを土壌にして、もう1つは、自分のあり方や生き方を更新することが、進路目標を実現するために必要だと自覚するかどうかではないでしょうか。

柏木 そう言えば、「この1年間は何だったのか」と後悔した生徒は、自分の将来の夢は教師だと、私に教えてくれました。将来の夢があったからこそ、「学校の先生になりたいのなら、このままでは駄目だ」と思い、自分を変えようと決意したのかもしれないですね。

佐藤 その生徒は、「家族の次に子どもの変化に気づいてあげられるのは、教師だと思う」、「自分もこれまで先生たちに温かく育ててもらった。だから私は、子どもの心に寄り添うことができる教師になりたい」と、私に話してくれたことがあります。そういった思いがあったからこそ、探究学習を通じて自分を変えようと思ったのでしょうし、探究学習に取り組む中で同じグループの仲間の考えや思いをうまく引き出せない自分に苦悩したのでしょう。進路の目標があったことで、失敗をきっかけに「変わりたい」と強く思い、変わるチャンスとするべく、探究学習に主体的に取り組んだのでしょ

「社会問題 = 自分の課題」とすぐになるとは限らない

柏木 「自分を変えたい」という言葉は、純心女子高校の生徒からも聞きました。「先生と生徒の対話による新しい授業」という課題に取り組んだ生徒は、その課題を設定した理由について、「授業が分からないのは、自分

自身の授業の参加の仕方に根本的な問題があるのではないかと思った」と話してくれました。そして、「自分自身の問題に目を向けないまま、先生だけに不満をぶつけるのは嫌だし、そんな自分を変えたいと思った」と言いました。ただ、同じ「自分を変えたい」という言葉ですが、鮮烈な失敗経験と将来の夢を結びつけて自分を変えたいと思った遠野高校の生徒とは、言葉の意味が違う気がします。

槌本 そうですね。本校の生徒が「自分を変えたい」と思ったのは、受け身の態度で授業に臨む自分は、そのままにしておけないほどの切迫感のある困り事だったからでしょう。

柏木 日々の授業という高校生活の大半を占める事象についての問題だったから、自分を変えたいという思いを持って主体的に探究学習に取り組めたのだとしたら、探究学習では切迫感のある困り事を課題にすることが重要なのだと思います。しかし、現実には、同じ授業を受けて、同じように「この授業は分からないな」と思っても、自分の力で授業を変えようとまでは思わない生徒が大半なのではないでしょうか。また、そもそも自分が生活の中でどんな困り事を抱えているのかを自覚できていない生徒もいるように思います。現場の先生方が、「探究学習では課題の設定の段階で苦勞している生徒が多い」とよく言われるのも、生徒自身が身の回りの困り事を自覚することが難しいからではないでしょうか。

槌本 生徒は、社会には様々な問題があることを知っています。しかし、問題であることは知っているけれども、自分の課題にはならないのでしょう。紛争や環境破壊、貧困や差別などの問題を知ってはいるし、心は揺さぶられるけれども、多くの場合、それらはすぐには自分に取り組むべき課題にはなりません。社会の諸問題が自己課題になるには、社会問題と自分自身に対するイライラやモヤモヤを結びつける時間が必要だと思うのです。

自分の中のイライラ、モヤモヤと社会問題をつなげる

柏木 事実として知っている社会問題を、自分自身の個人的なイライラやモヤモヤと結びつけることができれば、社会問題が自分の困り事として捉えられる、つまり、自分事化するという仮説はとてもユニークです。外に目を向けるだけではなく、内面にも目を向けることが、外を見る目を磨くことになるということですね。

槌本 高校生に限らず、私たちは皆、自分自身に対して何らかのイライラやモヤモヤを抱えています。誰の中にも「変わりたい」という思いはある。でも、そうしたイライラやモヤモヤを直視せず、「このままでもいい」、「仕方ない」などと、フタをしてしまっているのが現実です。しかし、探究学習で設定する課題を自分のイライラやモヤモヤと結びつけられたり、その課題に取り組む中で自分のイライラやモヤモヤが解消されたりする可能性に気づいたら、探究学習の課題は自分事化し、探究学習が自分を変えるチャンスになるのだと思います。本校の探究学習では、課題の設定に多くの時間をかけていますが、身の回りの問題に目を向けるだけではなく、問題と自分自身の課題をつなぐためには必要な時間だと考えています。

佐藤 「生徒は社会のことを知らなすぎるから、課題の設定が難しい」と考える教師は少なくありません。そのため、SDGsなどを切り口に、現代の諸問題について知る時間を生徒に与えるわけですが、それを知ったとしても、いつまでもひとごとのままという印象は、多くの教師が持っているのではないのでしょうか。外に目を向けるだけでは、外と自分がつながらないのかもしれない。遠野高校での探究学習を振



り返ると、探究学習に対する生徒たちの熱量が一気に高まったのは、柏木さんを始めとする社会人アドバイザーに自分たちの企画をチェックしてもらった後でした。「なぜ、そう考えたの?」、「根拠は何?」、「なぜ、その手法を選んだの?」などと、問いを重ねられた中で、中学生の数学力の向上という自分の外の問題が、「自分も実は苦手教科ときちんと向き合っていないのではないか」、「根拠を明確にしながら物事を考えることを避けてきたのではないか」といった自分の中の課題と結びついていったのでしょうか。

生徒のイライラ、モヤモヤにフタをしない

槌本 探究学習を主体的な学びにするためには、生徒の中にあるイライラやモヤモヤにフタをしないことが大切です。生徒が内心、「このままでいいのかな?」と思っているところに、私たち教師が、「このままでいいんだよ」と安易に受容したり、「何だ、そのやる気のなさは!」と否定したりしてしまうと、「じゃあ、このままでいいのか」、「そんなふうに言われても……」と、生徒の気持ちにフタをすることになりかねません。

佐藤 槌本先生のお話にすごく共感します。結局、生徒が変わり始めるのは、私たち教師の「変わりなさい」という指導を受けた時ではなく、生徒自身に「変わろう」という思いが生まれた瞬間です。だから**私たち教師は、面談などで「君はどう思っているの?」などと問い続けるしかない**と思っています。

槌本 生徒がいつ変わり始めるのかは、誰にも分かりません。もしかするとそれは高校卒業後かもしれない。高校時代に、いつか変わるための一步を踏み出してくれればよいわけで、高校3年間の中で変わることができなかったとしても、私たち教師はその生徒に失望することはありません。ただ、**いつ変わり始めるか分からないからこそ、探究学習でも、そして進路指導でも、「今の自分についてどう思っているの?」、「君はどうしたいの?」などと私たちは問いかけ、生徒を揺さぶろうとする**のではないのでしょうか。

佐藤 22年度の探究学習を振り返ると、「今の自分について、どう思っているの?」、「このままでいいの?」、「どうすればいいと思う?」などと、生徒自身に考えさせるための問いを重ねていたはずなのに、私の気持ちが急いでしまい、「このままでは間に合わないから、この日までにこれをやって!」と、生徒に雑なかかわりをしてしまったことが一度だけありました。当然、生徒たちの活動は、私のその指示によって活発化することはありませんでした。私はすぐに、生徒が考え、決断する場をつくらなかったことを生徒たちに謝罪しました。**探究学習は、生徒に任せきりにしてもいけないし、教師の指示に従わせるばかりなのもいけない。教師ができることは、生徒に「君はどうしたい?」、「このままでいいの?」などと問いかけ、考えさせることだ**と思います。

主体的な学びを促す「生徒への問い」

柏木 私は佐藤先生の授業のことも詳しく伺っていますが、「君はどうしたい?」といった言葉は、ご自身の数学の授業でもよく生徒に投げかけていますよね。

佐藤 生徒が授業に当事者意識を持って参加できるような配慮はしています。例えば、社会人に授業に参加してもらって、高校での学びは社会に出た時にどのように生きるのかを話してもらったり、単元の学びを通して何ができるようになりたいかをクラスで話し合ったりしています。また、家



庭学習の課題も、私から一方的に出すのではなく、どんな課題を、どのくらいの分量・頻度で出してほしいのか、そもそも今の自分たちに課題は必要なのかを話し合う場をつくっています。授業においても、自分がどうしたいかを考えることで、当事者意識を高めることができると考え、実践してきました。

柏木 槌本先生の化学の授業は、生徒が自学では分からなかったところをグループで話し合い、それでも解決できなかったことを整理した上で、何について、どこまで説明してもらいたいかを槌本先生に伝えて、授業をつくってもらうという進め方だと、生徒に教えてもらいました。生徒たち自身が「どうしたいか」を考えたことを土台に、授業が成り立っているんですね。

槌本 生徒は、「グループ内で単元の内容を説明し合ったり、問題を解いたりする中で、この部分がよく分かっていないことに気づきました」などと報告に来ます。それを受けて、次の授業で私が説明することもあります。私のアドバイスをもち帰って、再度グループ内で話し合い、生徒同士で解決してしまうこともよくあります。授業の進め方を生徒に任せているとも言えますが、だからこそ生徒たちは、化学の成績が伸びる理由も、思ったほど伸びない理由も、自分の課題として把握できているはずです。23年度大学入試に臨んだ生徒たちは、成績下位層の生徒であっても、最後まで諦めることなく、職員室に繰り返し足を運びました。一方で、見事に合格した生徒に笑顔が見えなかったのが、どうしたのかと聞くと、「自分の学習上の課題が分かっているから、大学入学前にやるべきことが多くて大変です」と答えました。自分の課題を理解し、やるべきことに取り組もうとするその生徒たちに、私は素直に尊敬の念を抱きました。

探究学習で味わう「教師の喜び」

柏木 生徒が主体的に探究学習に取り組むために、「自分を変えたい」という思いを生徒の中でどのように顕在化させるかについて、先生方と話し合ってきました。良質な失敗や後悔の経験をすること、進路目標を持つこと、自分のイライラやモヤモヤに目を向けることなどが、生徒にとって大切であるというお話がありました。また、どの生徒も必ず持っている「変わりたい」という気持ちにフタをしてしまわないようなかかわりが、教師には必要だというお話もありました。そのいずれにおいても、生徒に問いを投げかけ続け、生徒自身の気づきを待つような粘り強いなかかわりが必要で、改めて生徒の探究学習を支援する先生方の大変さを感じました。

佐藤 実際、探究学習では、どのように生徒を支援すればよいのか、分からないことばかりです。後になって、



「こうすればよかった」と後悔することもたくさんあります。一方で、探究学習を通して、教師の私も生徒から想定外の喜びをたくさんもらってきました。22年度の探究学習を終えたある生徒に、「探究学習の経験は今後の人生にきっと生きてくるよ」と話したところ、その生徒が笑顔で、「はい。私も自分の将来がとても楽しみです」と言ったのです。探究学習を通して、自分の強みや進むべき方向が見えたのでしょう。自分の将来に期待する言葉を素直に出せるようになった生徒の成長に心から感動しました。

槌本 探究学習で「先生と生徒の対話による新しい授業」に取り組んだ生徒の1人は、「探究学習を通して、自分は失敗を楽しめるようになった」と私に言いました。その生徒たちは、探究学習の中で確固たる答えを出せたわけではありませんし、周囲との衝突も経験し、苦しい思いもたくさんしてきました。それでも、「失敗を楽しめるようになった」と言えたことは、私にとって、その生徒たちの探究学習が成功した証しにほかなりません。

柏木 生徒の探究学習にかかわらせてもらう中で、私にも喜びや発見がたくさんありました。その1つが、遠野高校で、自分にはコミュニケーション能力が足りないと思う生徒と話した経験です。ゆっくりと、丁寧に言葉を選びながら自分の考えを語るその生徒は、達弁ではありませんでしたが、聞く人の心を揺さぶる力を持った言葉を紡いでいました。また、ポートフォリオに書かれた振り返りを読ませてもらったところ、読む人も一緒に深く内省してしまうような文章に驚かされました。私はその生徒に、「あなたは自分のことをコミュニケーション能力が低いと言うけれど、私はそうは思いません。コミュニケーションが他者に学びや気づきを与えるものであるならば、あなたのコミュニケーション能力は極めて高いと思います」と正直に伝えました。探究学習では、生徒は自己課題に向き合うことが重要ですが、課題だけでなく、自分の長所や美点を発見することも大切にしてほしいと思いましたし、生徒の長所や美点に出合う感動を知っているから、先生方が苦勞しながらも、探究学習に情熱を傾けられるのだと分かりました。先生方、そして生徒の皆さん、ありがとうございました。